

第18回 日能研

# 文学コンクール

## 優秀賞

【論説文】 臆気になった大人

私立武蔵高等学校・二年

滝澤 尚太さん

作品に対する思い・感想

この度は優秀賞に選出頂き誠にありがとうございます。深く選考して頂いた審査員の皆様に感謝致します。

本文では、自分自身の経験談も交えながら、子供と大人を巡る問いに新たな一つの視点を示すことができたと考えています。

今後も、様々な社会問題の解決の糸口となるような視点を示せるように、日々精進してまいります。ありがとうございました。

「大人になる」とはどういうことか。これを考えるにはまず「大人」について定義しなければいけないわけだが、これが非常に難しい。「大人」と「子供」が「黒」と「白」のような対極になっている存在であればよいのだが、残念ながら「大人」と「子供」には「黒」と「白」でいう「グレー」のような曖昧な境界がついて回る。つまり「大人」と「子供」に明確な差はないといえるのだ。勿論、中には成人式で「大人」と「子供」が区別されるという人もいるだろう。だが、国の都合で時期がコロコロ変わってしまうような成人式、果たしてそれが正しい「大人」と「子供」の境目だと言えるのだろうか。

しかし、よく考えてみれば私が幼稚園児の頃、小学生は大人にみえた。「一人で歩いて学校まで行くななんてすごい」と尊敬のまなざしを向けていたことである。なのに、今となっては小学生はまだまだ子供だと分かる。それは小学生になっても同じで、小学生になると、今度は中学生以上が大人にみえるようになった。中学生になると今度は高校生以上が大人にみえるようになった。

つまり、成長するに従って「大人」というモノがどんどんと変わっていったのである。では、いつこの『「大人」というモノの変化』はなくなるのか。すなわち、いつ自分自身より年上の人間を「大人」だと思わず、自分自身のことも「大人」だと認識できるようになるのか。

それは、「子供」の活動範囲が拡張しきったときだと私は考える。

幼稚園児の頃、主な活動範囲は家だっただろう。それが小学生になるとその活動範囲は地域内になり、中学生になると隣の地域まで広がり。どんどんと成長するにつれて活動範囲は広くなっていく。その限界値に達したときが私の考える「大人」になったときなのだ。なぜなら、活動範囲というのはいやおうなしにその人の生存能力と比例すると私は考えるからだ。これは石器時代の狩猟・採集をしていた頃から変わらない。狩猟・採集は活動範囲が生存能力に直結する、そのことを考えてもらえれば分かりやすいだろう。例を出すと、たとえば部屋から出ないニートは私の定義では子供になる。なぜなら、活動範囲が狭いからだ。逆に東横キッズなどと呼ばれる集団は私の定義では大人になる。活動範囲が広いからだ。もちろんこれに否定の意見が多くなるのは百も承知だが、それでも同年代の子供たちより大人だというのは納得してもらえるのではないだろうか。

さて、ここで重要なポイントになってくることがある。

それは『活動範囲』が大きく変化したときだ。私の定義では『大人』は年齢ではなく活動範囲に依存する。ならば、その活動範囲が変わった時、大人はどうなってしまうのだろうか。

たとえば、日本に住む大人がアマゾンのある村に連れていかれた時のことを考えてみよう。その地域では、彼はもちろん活動範囲はゼロに等しい。すると彼は子供になるのだ。火も起こせない、舟にも乗れない、狩りもできない。そんな人は、その地域では子供になってしまうのだ。つまり、大人になったら永久的に大人だというわけではないということがいえるだろう。子供と大人は不可逆的な関係ではないということだ。

ここで、改めて最初の問い、「大人になる」について考えてみよう。

まず、大事ななのは自分の周辺の見聞を高めることだ。それが「大人」になるまでの一番の近道だ。だが、このグローバル化が進む現在。いつ外国へ行く事になるか分からない。もし貴方が大人になって海外出張することになったとき、その出張先では、貴方が子供になってしまうことも大いにあり得るのだ。

それを防ぐためにも、いま私たちに求められること。

それは世界を知ることだ。

一昔前までは日本国内だけでよかった。

だけど、もうだめなのだ。

これから私達が迎えようとしているのは国境が曖昧になった世界。

それに対峙するためには世界を知ることが必要不可欠なのだ。

そのためにも、『世界を学ぶ』。

これがきっとこれからの「大人になる」ための重要な鍵となってくるだろう。